TATの分析・解釈について

藤　本　麻起子

1. はじめに

TAT（Thematic Apperception Test）とは，人物や風景などが描かれた図版を見て物語を語ってもらい，そこからパーソナリティを推測していくという心理テストである。しかし山本（1992），鈴木（1997）によるとTATはその有用性が認められ難く，使用されることが少ないテストであり，その背景としてTATの分析・解釈法が確立していないことがあげられるという。さらに言えば，TATは「解釈法が全く存在しないわけではなく，さまざまな研究者がそれぞれに解釈法を提示しようとしてきたのに」，「未だに『確立』されていないという印象」（鈴木，1991）がもたれてしまっていたり，「分類や得点化，判定などの標準化にはそぐわないテストである」（海本，2004）とされていたりする。

心理テストである以上，TATにはテスト性，つまりTATのどこから何が考えられるのかといった枠組を備えているはずなのに，特定の分析・解釈法が確立し難い，あるいは分析・解釈法の標準化がなじまないとされるのはなぜだろうか。その背景を本稿では，これまでのTAT研究，TATの特質から考察し，TATの特質を生かした分析・解釈を試みる。また，従来のTATの分析・解釈についての議論は，TATの臨床的な使用に限ったものが主流であるので，本論文では，調査の手法としてTATを使用したときの分析・解釈の問題についても触れることとする。

2. TATとは

TATは1943年，Henry Murrayらによって考案された。TATには様々な種類があるが，最もよく使われているHarvard版では，「"現実"のコピー」（安香，1997）と言われるような，様々な人物や場面が描かれた図版31枚から成る。この中から被検者の性別や年齢に応じて選出された20枚の図版に対して，過去・現在・未来にわたる物語をつくってもらうのである。またTATは図版に描かれた場面，すなわち刺激の曖昧さゆえに投影法に位置づけられており，心理テストの中では比較的，無意識の領域を映し出すものと考えられている。

このようなTATからパーソナリティのどのような側面が表れるかについて，Murrayらの"Explorations in Personality"（1938）をみると，Murrayは"生活体に影響を及ぼす環境の力（圧力）と，圧力に対する生活体の内的な反応（欲求）の力学的な構造"，つまり「主題（テーマ）」と，そのテーマが生きられる，圧力と欲求の相互作用である「エピソード」とがTAT の物語からよみとられると考えていたことがわかる。

現在ではTATで何がみられるのかについて，「被検者自身の人や物とのかかわり方」（鈴木，2002b）や「主体が自己の直面する状況に対してどのようにとりくんでいるのか」といった「か

かわり方」（山本，1992），「現実生活における具体的諸条件ないしは状況のコピー」である図版をどう処理するかというところに「現実対処能力」が表れる（安香，1997），というように，人，物，現実に対する被検者の"かかわり方"が表れているというのが共通見解である。

さてTATの分析・解釈法については，Murrayは欲求－圧力のリストを使って分析・解釈をすることを提示しているが，Murrayは「TATそのものにさほど身を入れていなかったようで」，「心の内面知覚について鋭敏な直観力をもっていれば素人でも使えるし，その上でそこに示される構造をずばりひきだす鑑識眼のある直観力を備えることを強調している」（山本，1992）というように，欲求－圧力分析を推進するよりも，TATをよむ臨床家としての目と感性を重視した。

このことは，MurrayがTATを軽視したということでは決してない。TATをよむ目と感性というのは，TATを行う者にとって常に研鑽し続けなければならないほど重要で，かつ完成することのないものである。直観でTATをよむためには訓練が必要であるし，また直観によってTATを分析・解釈することで，豊かなパーソナリティが描き出されることは事実である。

しかしながら，Murrayが"直観"を重視し，明確な方法論の確立を目指さなかったことで，その後のTATの分析・解釈について様々な議論を呼ぶこととなったと思われる。では次に，どのような分析・解釈法が提唱されてきたのかをみてみよう。

3. TATの分析・解釈についての先行研究

ここでは「臨床心理学」第2巻第4号（2002）の「TATの基本」，同巻第5号（2002）の「TATの解釈」，及び第3巻第1号（2003）「氏原氏の疑義に答える」に寄せられた4名の分析・解釈法を概観する。TATの分析・解釈法の全てを網羅することはできないが，これらで挙げられていた分析・解釈法は，様々なTATの先行研究を受けた上で各自が織り出した方法論であること，方法論を述べるだけでなく，共通の事例（井口，2002）を元に実際に分析・解釈を行っており，各自の論を比較しやすいこと，「TATの解釈」という特集で選出された，代表的な分析・解釈法であると考えられるといったことから，先行研究の整理の核になるものと判断とした。

(1) 16歳　摂食障害女子の図版1に対するプロトコル

これは井口（2002）がテスターを務めた，16歳の摂食障害の女性のプロトコルである。紙面の都合上，図版1のみ記す。

図版1プロトコル　初発反応時間　15秒　反応時間1分7秒　　＊（　）は検査者のことば

これみて話すんの？どうやってこたえるの？どうやってこたえたらいいんですか？（この子が今どんな風で，これからどんな風になっていくって話をつくってくれたらいい。）悩んでます。（どんなことに？）上手にひけるかな。（えっと，上手にひけるかなっていうのはバイオリンを？）バイオリン。（この子はやったことあるの？）もうすぐコンクールとかあって，上手にひけるかなとか考えとる。（で，どうやろ。）ちょっと不安。（どうするやろ？）コンクールに出やんとこかなとか，出たくないなあとか，失敗したらどうしようとか，そういうの考えとる。（で，どうなると思う？）成功すると思う。

(2) 藤田の分析・解釈

藤田（2002）は「TATのプロトコルをある共通視点から検討し，各カードのプロトコルに共通する特徴を要約して抽出する作業」を「分析」，「分析から得られた特徴を根拠にいくつかの解

釈仮説を立て，それらをある人格理論から統合するプロセス」を「解釈」と定義して両者を区別し，「情報分析枠」を提唱した。具体的には，「初発反応時間」，「感情」，「人間関係」などを分析項目として分析情報枠を設定し，図版毎に反応をチェックする。そして多くの図版に共通する特徴，逆に共通する特徴から外れている反応に注目しながら仮説を作成し，出てきた仮説を重ね合わせ，総合して解釈としてまとめる，という方法である。

例えば「結末：結末をどのようにまとめているか」という分析枠では（1）のプロトコルに対し，「なんども質問されてはじめて『成功すると思う』と述べている」ことから，「①課題に真剣に取り組んでいない，②全般的に前向きの意欲が乏しく，良くも悪くも将来のことを考えられない状態にある」という仮説を挙げている。そして解釈では，「①表面的には無難に対応するが，基本的には外界に積極的に，深くかかわろうとする意欲は乏しく，課題回避的である」ということを述べている。

（3）豊田の分析・解釈

豊田（2002）は，「日頃から解釈の枠組としている」という「1.家族関係，2.一般的対人関係，3.異性との関係性・成熟性，4.自己像，人格特性，病態水準」の4つの視点から分析・解釈を行っている。例えば「4.自己像」については，（1）のプロトコルから「評価を気にして不安が高く，観念的であり課題を現実的に処理していくことが苦手な姿をみている。ここには，『考えている，自分に似ている』姿としての自己を認めている」と述べている。さらに図版3BM，12Fから考えられた「不安を抱えた状態に留まって考えているばかりの自己」「評価や外見にとらわれる自己」といったことを重ね合わせ，「negativeな自己像」とまとめている。

分析・解釈のプロセスは「誌面の都合上」省かれているが，「全体的にみると，男女関係については平凡反応レベルの，Card特性に対応した物語」という記述や，「16歳という年齢は，発達的に第二次性徴を迎え，その変化をいかに自分のものとして受けとめるのかという性的な同一性の発達が課題となり始める時期」といった記述から，TATの図版特性や，心理学の一般的な理論を手がかりに人物像を描いていると推測される。

（4）氏原の分析・解釈

氏原（2002）は特に分析の視点には言及せず，図版ごとに解釈を述べている。図版1に対する解釈は「まず目につくのは，主人公（したがって被験者[注1)]）の関心がもっぱら『いま・ここ』に集中していることである。･･･単純化すれば刹那的，衝動的ということである。･･･だから，物語の結末で『成功する』と言われても，具体的な迫力に欠け，単なる願望充足的なとってつけとしか思えない。16歳にしては未熟な印象」，「しかし･･･主人公はコンクールに出ようとしており･･･ひとりよがりではすまない客観的な場に身をさらして，おのれの相対性に気づかざるをえない」，「そしてそのことは，まさしく思春期的課題としてこの年頃の子どもたちすべてが引き受けるべきものである」というものである。そしてこういった見解を総合して「"意識的"には年齢相応の発達をとげているが，無意識的には葛藤回避的な傾向が強く，そのズレが身体化－摂食障害という形で顕在化している可能性がある」と述べている。

（5）鈴木の分析・解釈

鈴木（2002b）は「ある特定の物語を生じさせるもの（条件）を知るには，特定の理論に囚われることなく，物語自体の客観的な検討から始めなければならない」として，分析・解釈の方法

の1つに「物語をいくつかの要素に分解することと，そのカテゴリー化を通して，一般的に物語を調べる視点を用意すること」を提唱し，全図版における多数のプロトコルの反応を分類し，また各反応における意味づけを行った（鈴木，1997)。この反応分類は解釈の「足がかりを得るための作業」であり，解釈のためには「ここから心理学的知識やら臨床経験やらを総動員して，物語が意味するものを探索しなければならない」(鈴木，2003b）という。

井口の図版1のプロトコルについては，「物語作りの態度から，被検者がきわめて受身的，依存的であり」，「求めに応じようとする姿勢すら非常に弱いこと」を推測している。また「コンクールで失敗したらどうしようと不安に思っている内容からは，そのまま，被検者が人前で失敗することに非常に過敏になっていることを推測してよいであろう。なぜなら，このカードでコンクールに出ることの逡巡や失敗の不安は，一般的に見受けられるテーマというより希少なものであるからである」ということに言えることは尽きる，と述べている。

4. TATの2側面

3. ではTATの分析・解釈法について4名の見解を述べた。ここでは各自の方法の特徴について，"テスト性・客観性"と"物語性・主観性"という，2つの側面から論じていこうと思う。まず"テスト性・客観性"，"物語性・主観性"とは何かということを，この側面を考える元となった"氏原・鈴木論争"及びこの論争に対する藤掛（2003）の意見からみていくこととする。

(1) "テスト性・客観性"と"物語性・主観性"

鈴木（2002c）が豊田（2002)，氏原（2002）を「解釈の独り歩き」と批判し，これについて氏原（2003a）が，解釈に当たっては「"直観的"な方法に依拠している」が，その背景には，「長年の臨床経験と理論的な枠組み」があり，「何とか辻褄が合っておれば，大体において解釈は妥当という臨床的な感触が私にはある。」と反論した。さらに氏原（2002b）は，"投影法の解釈は，反応の意味が一義的に解釈と結びつくものではなく，臨床的に妥当な解釈は幾通りもありえ，その妥当性は，その解釈がクライエントの役に立ったか否か，被験者のその後の臨床的プロセスが大体において解釈どおりであったかどうかによる"と述べた。

対して鈴木（2003b）は「もし1つの物語がどんな解釈をも許すのだったら，もうそれはテストといえない」のであり，「解釈における確かな根拠」は，「同じ絵に対し作られる可能性のある多種多様な物語との比較検討をおいてほかにない。…それは，物語があくまで共通の絵に対する振舞い方であるからである。」とTATの反応分類の必要性を強調している。

この論争から藤掛（2003）は，TATには鈴木が主張するような「最低限言えることだけを所見にする」「査定的な文脈」と，氏原が主張するような「解釈の可能性を精一杯広げることが重要になる」「治療的な文脈」がある，と述べている。筆者も藤掛の論に同意する。

ここで「査定的な文脈」と「治療的な文脈」についてさらに考えてみると，「査定的な文脈」とは"分析・解釈の根拠をTAT及びTATの反応そのものに求める"という，TATの"テスト性・客観性"を生かした立場であると考えられる。つまり，ある図版はどのような特徴を持ち，それゆえ何が引き出され得るのか，どのような反応が得られるものなのかということをふまえて分析・解釈するのである。鈴木（1997）の反応分類からは，物語の典型例が存在すること，坪内（1984）をみれば，図版の中にはほとんどの人が認知するものと，稀にしか見られないものがあることが

わかる。多くの人が語り，あるいは見出すものはそれだけ客観性の高いものであり，主観，いわばその人らしさはそれだけ低いことになる。TAT物語の分析・解釈の根拠を，物語を引き出す共通の対象であるTAT自体に求めることは，TATがテストである限りは必要なことである。

そして「治療的な文脈」とは"分析・解釈の根拠を検査者の臨床的経験・主観に求める"立場であると思われるが，検査者に自由な連想や直観がはたらき，それを手がかりにできるのは，TATが語りを求めるものであること，つまり"物語性"を有しているからであると考える。心理テストも心理臨床の営みである以上，TATへの語りは面接での語り，検査者と被検者との関係性の中[注2)]で紡がれる唯一独自のものである。ここでいう物語とは語られた物語そのものだけでなく，物語になる以前のことば，被検者の表情，語り方など，物語が生成する状況をも含んだものである。物語には「具体的な出来事，事象と事象の間をつなぎ筋道を立て」る（森岡，2004）"流れ"があり，またことばやイメージのもつ多様性が含まれる。面接での語りの分析・解釈法が諸説あるのと同様，TATの語りについても多様な分析・解釈法が許されるという一面もあると思われる。

「一軒の家にたとえれば，言えることだけを絞り込む解釈は土台にあたり，自由な連想解釈は屋根にあたる」と藤掛（2003）が述べている通り，筆者もTATのもつ"テスト性・客観性"と"物語性・主観性"の2つは相補うものであり，両方が必要なものであると考える。しかし得てしてこの両立が難しく，どちらかを強調した立場であることが多いと思われる。その理由は，鈴木と氏原の対立にみられるように，"テスト性・客観性"の立場は集団の中に個人を位置づけ，テストの特徴に従って物語を意味づけるのに対し，" 物語性・主観性"の方では，個人の物語を唯一独自のものとし，唯一独自の関係性や検査者の直観などに従って物語を意味づけるという，相対立するところがあるからだと考える。では両立のためにはどのようなことに留意すればよいのだろうか。このことを3. で挙げた諸氏の分析・解釈から考えてみたい。

(2) 分析枠・記号化を主とするもの

藤田のように，分析の際の視点をいくつか挙げて解釈に結び付けていくという方法論は，安香・山本（1992）にも共通する。この方法論は，生のプロトコルを解釈していく際の手がかりとして「どんな理論的立場に立つにせよ，共通で行われる」分析の「小道具」（安香，1997）が挙げられていること，したがって分析と，それを元にした，解釈の視点が明確になりやすいという利点があると考えられる。

しかしながら鈴木（2002c）は「一般にイメージされるような分析枠はTATには馴染まない」，「全カードに共通に適用しうる分析システムは…各カード間の質的差異というものへの顧慮が不足している」（鈴木，1997）と述べている。この問題については，図版ごとにその特性を生かした分類基準を作成するという方法があると考えられるし，これまでの分析枠が，多数のプロトコルを分析する中で，そこに表れるものを生かすべく生み出されてきたと考えられることからも，分析枠はTATの"テスト性・客観性"を生かした有効な一手法と考えられる。分析の視点というのは多数あるが，分析枠はその中でも，より意味がある視点を絞り込んだものといえるので，分析枠は分析の視点を全て言語化して全反応をチェックするという大変な手間を省くことにも役立つし，どのように物語をよんでいくかに精通していないTATの初心者にとっては，分析・解釈のヒントとなろう。

しかし分析枠や記号化からプロトコルを読むという方法は，比較的大雑把な基準で物語の流れ

を"切る"という特徴があると考えられる。ある1点では同じ内容であっても，その前後の流れでその1点のもつ意味が異なるということが物語にはある。例えば図版2で，描かれている3人を全て関係付けたか，という項目があったとする。図版2は3人をどう関係付けるかというところに，語り手の対人関係の持ちようが表れると考えられているので，この項目は3者関係をもてるかどうかという点を考えるのに1つの指標となろう。しかし物語には"流れ"があるので，"3者関係がもてるかどうか"という内容とその後の3者関係の様態は完全には切り離せない。設定の違いは，当然解釈の違いにもつながっていくだろう。例えば3人がばらばらになっていくという流れや，"3人は仲のいい友達同士でした。しかしあることをきっかけに仲違いしたまま死ぬまで会うことはありませんでした"といった場合，"3者関係がもてる"と言いがたいところもあるだろう。確かに"3者関係をもてるかどうか"という1点についてチェックはできるが，質的な差異を含みながらも"3人を全て関係付けたか"という項目の元に，一くくりにされてしまう恐れがあると考えられる。

ところで鈴木（2002b）は「記号化やそれに関する試み」は「集団間の差異のリサーチにおいては，ある程度有効であろう」と述べており，確かにこれらの方法は調査研究でよく使われている。先の図版2の例で言えば，もし2集団間において，一方の集団が他方の集団よりも3人を関係づける語りが統計的に有意に少なかったとすれば，その集団は3者関係を持ちがたいということが推測される。しかしここでも，先に述べた"流れ"を損なうという問題がある。集団をまとめるに際しては，1つの視点で区切ることでその特質がつかみやすくなるし，集団に対する調査という性質上，個別性がある程度失われるのはやむを得ないことではあるが，TATの物語性，特に物語の"流れ"が損なわれる面もあるということを自覚し，項目を精選する必要があろう。

(3) 直観を主とするもの

豊田（2002）の「人間性，臨床経験，投影法理論，発達論……あらゆるものを駆使」する方法や，氏原（2003a）の「長年の臨床経験と理論的な枠組み」を背景とした「直観的な方法」は，"臨床経験"や"直観"でプロトコルに向かい合うという，TATの主流の分析・解釈法の例であり，"物語性・主観性"を生かした立場であると考えられる。心理面接においてはクライエントの語りを，理論，連想，クライエントの表情，クライエントとセラピストとの関係性など，まさに「あらゆるもの」を使って考える，と言えるのと同様，関係性の中で語られるTATの物語の分析・解釈においても「あらゆるもの」を使う，としか表現できないところがあるだろう。

しかしながら「あらゆるもの」を使う，というだけでは，TATをどうよんでいったのかについて，あるいはなぜそういえるのかについて，わかりにくさは否めない。氏原の解釈についても，分析の視点やプロセスが記述されていないため，内容に共感できるところはあっても，唐突な印象を受けるところがあると思われる。解釈の内容と，その根拠や筋道の説明をすることとは別の話である。TATを利用する人々（セラピスト，クライエント，テスト依頼者など）が解釈を共有，あるいは自ら使っていくために，できるだけ根拠や筋道の言語化に努め，どうしても"そう思えるとしか言えない"ならばそのことを書くことが必要だろう。

そして"物語性・主観性"の立場においても，TATの"テスト性・客観性"はもちろん必要である。この点については，先に"テスト性・客観性"の立場である，反応分類を主とするものを検討してからの方が明確になりやすいので，先に話を進めることとする。

(4) 反応分類を主とするもの

ここには鈴木の他に，「標準的な反応とその意味を十分周知しておき，それを踏まえながら，その人の反応において標準的な反応ぶりがどういうふうに見られるか，また標準からずれている点がどのように見られるかに注目して分析していく」，安香（1997）も位置づけられる。この立場は心理検査の条件である「弁別性」（前川，1991）を重視したものと考えられる。

例えば図版1に描かれた少年が悩みを持つという設定は，鈴木（1997）によると80～90%の人が語る，いわゆる標準反応で，そこから被検者の独自性は考え難いとみなされているものであるのに，そのことを知らずに"少年に悩みを見出したことから，この語り手に悩みがある"と解釈するならば，この解釈の妥当性は低いと言えよう。あるいは検査者自身が図版1で大多数"バイオリン"と認知されるものをギターと認知しているため，非常に稀である"ギター"という反応が標準的であるとみなしてしまうといったように，標準反応を知らなければ，検査者自身の物語だけを比較の根拠としてしまうという問題があり得る。このようなことは初心者や，(3) でのべた"物語性・主観性"を中心とする立場では起こりやすいことであり，この問題を避けるためにも，標準的な反応を知っておくことが必須である。

ところで鈴木（2003b）は，反応分類をマニュアル的なものではないと述べているが，物語を機械的に分類枠にあてはめ，標準反応か否かをチェックするだけでは，物語のもつ多様な意味をとりこぼしてしまうことになりかねない。標準的な反応といっても，図版1で"この少年は悩んでいます"と言うのと，"この少年は深く悩んでいて，夜眠れないほどです"と言うのとでは，被検者が見出す"悩みの深さ"は異なると考えられる。同じ反応とはいえ，その物語り方によって意味は違ってくるのである。そして標準反応であれ，あるいは集団の中に位置づけて比較するとはいえ，ある語り方や物語全体は，その場，その被検者，その検査者という条件の下で語られた，唯一独自のものでもある。標準反応であるかどうかを考えながらも，それは標準に"過ぎない"というものでは決してない，という態度で物語性を生かすことが大切であると考える。

5. TATにおける語りについて

4．では，TATの"テスト性・客観性"と"物語性・主観性"を両立させることについて述べた。しかし筆者としてはTATの"物語性・主観性"をより重視したい。その理由と方法論を以下に述べ，最後に具体的な分析・解釈例を示す。

(1) 投影法と物語

"物語性・主観性"を重視する第1の理由は，TATが投影法であるということである。刺激となる図版を受け取った時，まずはことばにならないレベル，無意識にまで刺激は届き，被検者の心全体が動かされるであろう。そして暗い，怖い，きれい，といった，情緒的であったり，きわめて個人的なエピソードが浮かび上がったりし，やがて教示に従って，その図版の状況がどのようなものであるか，どんなことがあってこれからどうなるのかということを答えるために，受け取った刺激と図版，無意識と意識，被検者自身の私的な領域と，テスト状況という公的な領域とを結び付け，実際に聴き取られる物語があらわれるものと思われる。

このような，被検者の心の動きを推測するには，検査者自身もまた心を使わなければならないと筆者は考える。被検者が図版に向き合って受けた新鮮な驚きや戸惑い，そこから物語が紡がれてくるプロセスを検査者自身も辿ることで，浮かび上がってきた物語を深く共有，理解できるも

のと筆者は考える。そして分析・解釈にあたっては，検査者はできるだけ自由な方が，検査者自身の心全体を使って，被検者の心の動きをより生き生きと感じることができるであろう。したがって， TATの"テスト性・客観性"を考慮することが必須ではあるが，まずは検査者自身が自由に心を使い，物語自体を味わうことが重要であると考える。

第2にはTATに表れる物語の深さである。条件の多数の違いを考えれば，TATの物語と心理療法における物語が同じであるとは言い難いところもあろう。鈴木（2002a）はTATの物語は「当人が現に生きている，あるいは生きる可能性がある物語を断片的に表して」いるものの「当人が生きるべき物語，生きるのがふさわしい物語を明らかにしてくれない」と考えている。しかしながらTATは被検者を1回限りの出会いでとらえる目的で工夫されているものであり，かえって「当人が生きるべき物語，生きるのがふさわしい物語」が圧縮された形で表れる，また少なくともその"断片"が表れると考えることはできるのではないか。語ることによって心が動き，心が動くことによって語られるTATの物語には，被検者自身の在り方だけでなく，被検者本来のもっている関係の持ちよう，被検者の願う在り方が重ねられることもあると思われる。またことばやイメージからなるTATの物語には，多様な意味，世界を有するものである。このようなTATの物語性を考えると，図版に規定された反応であるということや，何人中何人が示すような反応であるといった"テスト性・客観性"は物語の理解に必要ではあるが，それらのことを越える深さがあるとも言えるだろう。面接場面においてクライエントの語ることをよくある話だとしたり，ある状況では起こりうることであると考えたりする側面があっても，やはりその人にしかない深い物語として聴き，連想を働かせながら理解しようとすることと重なると筆者は考えるのである。

(2) 物語の捉え方

では"物語性・主観性"を生かして物語をとらえるにはどのようにすればよいだろうか。ここでは山（2003）の述べている，心理療法における言葉への姿勢が参考になると思われる。山は，「発せられた言葉の背後にある意味の世界へと身体を通して開かれ，そこに入っていく。これは知的に意味を探ることではない。その意味の世界には，言葉になる以前の混沌としたイメージの断片が浮遊しており，それを，五感を通して感じ取る」という在り方を主張している。これは先に述べた，TATが被検者と検査者共に無意識まで含めた心の全体が動き，その動きを辿ることが必要だと述べたことと重なると考えられる。

また「クライエントの『母は厳しかった』という言葉の背後に耳を済ませる･･･クライエントは『厳しい』母に対して，否定的な気持ちがあるのと同時に，そんな母を尊敬していたり，憎んではいても同時に，好きで好きでたまらなかったりということだって十分ありうるのだ。･･･そこにはクライエント本人も意識していない意味も含まれていて，クライエントとセラピストの関係性の中でこそ，それは解き開かれうる」と述べている。これをTATと重ねて考えると，例えば図版1で少年にバイオリンを練習させる母親が登場したとして，「少年の母は厳しかったのです」と語ったとする。この語りの裏には，山が指摘しているような否定的な気持ちだけでなく，本当は好きであるという気持ちも含まれているかもしれないが，ある程度ことばの意味を絞り込む手がかりとなるのは，物語の流れであろう。それは例えば，「少年の母は厳しかったのです･･･でもその母には優しいところもありました」と語られることによって母親が本当は好きなのであろう，と推測される場合もあれば，「厳しかったのです」と吐き捨てるように言う語り方によって，母

親を心底憎んでいるということがうかがわれる場合もあるだろう。

また，河合（1991）が述べている「治療者は，クライエントが語る，時には波乱万丈とも言えるような個々の『事件』に着目するのではなく，そのような事件にまきこまざるを得ないようなことまでして，その背後にあるたましいは，何を問いかけようとしているのか，それに耳を傾けようとする」ということも重要であろう。TATに現れる物語の筋書き，ドラマ性にのみとらわれるのではなく，また図版に対してみられるものが平凡か特異かということのみにとらわれるのでもなく，そのような物語を生じさせる「たましい」の問いかけ，言ってみればその人が生きる上で問題としているテーマとは何であるか，ということを考えることも大切であると考える。

抽象的な論ではあるが，そこの"わかりにくさ"は後の具体例で少しでも補うこととして，次に氏原・鈴木論争でも問題になっていた，妥当性のことについて触れたい。

(3) 妥当性

"物語性・主観性"により重きを置く立場では，その分析・解釈を第3者と共有することが難しいという問題がある。4. では直観をできるだけ言語化して根拠を明らかにすること，"テスト性・客観性"と併せて検討することが必要であることを述べたが，さらに"物語に沿う"ことが大切であると筆者は考える。物語をもとにイメージはどこまでも膨らみ，検査者自身の個人的な領域にまで及ぶかもしれない。しかし分析・解釈に当たっては，そのイメージはTATの語り，被検者自身のことばから離れてはならない。どれだけ主観を使おうとも，それが物語に基づき，物語と結びつけて考えを深められるようなものであれば，それは客観性を有しているといえよう。

また，ここでも面接の語りの分析・解釈，すなわちケースカンファレンスや事例研究における普遍性について述べている河合（2001）の論が参考になると思われる。河合は，「発表者が，条件a，b，c･･･のもとで，AならばBという発表をしたとき，それを聴く者は，むしろ，条件a，b，c，･･･の方は捨象してしまい，その発表から喚起される，間主観的な普遍性をもつXを媒介として，自分の心のなかで，A→Bと類似し得るA'→B'を思い浮かべ，得るところがあったと思う。これは参加者の主体によって変化し，A"→B"となることもあろう。しかし，そこに共通的に，間主観的普遍性をもったXを媒介としていることを忘れてはならない」と述べている。

つまり，河合の主張からは，「間主観的普遍性をもつX」にいかに関わっているかが，その事例の評価及び普遍性，すなわち妥当性を高めるものではないかと考えられる。同様に，主観性に重きをおいたTATの解釈についても，物語自体は初めて出会うもの（「a，b，c」）であり，あるいは提示された分析・解釈とは違う分析・解釈（「A'→B'」）を行ったりするとしても，提示された分析・解釈（「A→B」）が間主観的普遍性（「X」）に訴えられるものであり，納得しうる，了解できると思われるようなものであれば，その分析・解釈は妥当性を得ていると考えられるのではないか。氏原（2002）は分析・解釈の根拠を自身の「臨床的経験」に求めていたが，その経験が誰の「臨床的経験」においても通じるようなものであることが必要ではないかと思われる。

ただし河合（2001）がいう「間主観的な普遍性をもつX」は「人間の主観と主観のからみ合いを通じてのみ感じとられるものであるだけに，主観を通じてしか表現できず」，「直接的に表現不能」である。しかしながら分析・解釈を行ったものが，ことばと心を使って最大限に言語化する時，それは「間主観的な普遍性をもつX」に訴えるものとなると思われる。なぜなら「臨床の知は総合的・記述的であり，共通感覚的である」（中村，1992）というところがあるからである。

調査研究では，調査者以外の人に分類基準を説明し，物語の全部ないし一部をその基準に従って独立に分類してもらい，調査者の分類との一致度を計算し，その一致度の高さによって，調査者の分類の妥当性を保証するという方法がとられることがある。これは分類の客観性を高めるための手続きであると考えられているが，調査者のつくった基準に従って他の人でも同じように分類することを根拠とすることには，間主観的普遍性に訴え，調査者の考え方が了解し得るということでの妥当性の検証であるとも考えられ，TATの性質にあった方法であると言えよう。

(4) 筆者のプロトコル分析・解釈

ではこれまで述べてきたことをもとに，井口（2002）のプロトコルの一部を筆者なりに分析・解釈してみる。まず，図版を見て考えるのに短い時間ではない15秒という時間を反応までに要していることから，被検者は，図版を見てかなり心を動かされていたのであろう。「どうやって」と対処の仕方をきいている問いには，TATの図版がもつわからなさや，図版によって動かされた心を"どうしていいかわからない"戸惑いがあったと推測される。図版1のもつ "暗さ"に投げ込まれたと同時に，自分の心の暗さにも投げ込まれたような困惑を覚えたのではないか。

また「こたえる」という言い方も"語る""言う"とは異なるニュアンスがあるように思う。まさに問いがあって「こたえる」のであり，検査者は何か決まりきった答えがあって，正しくこたえることを気にしていたり，何か試されているというような感じがあったりしたのではないか。

続いて検査者の教示の中で「今，どんな風」ということに対してのみ，「悩んでいます」と極めて簡潔に答えている。"悩んでいる"という状況は，鈴木（1997）によると80～90%の人が認めるような心的状況である。ここから被検者は，図版に大半の人が見て取るものを見出し，言語化する力があることが推測される。しかしながら"悩んでいる"と一言述べるだけになっており，そこには被検者自身の自由さが感じられず，「こたえ」ることに必死になっている姿や，検査者の教示によって答えられたところに，他者を頼みにするところも推測される。

被検者の語っている"上手くひけない悩み"というのは，鈴木（1997）によると，少年に悩みを見出した反応の中では，最も多く語られる悩みであり，ここでも標準反応を出す力が想定される。さらに"上手に"というところには，自分をよくみせたいという思いが推測されよう。後に「もうすぐコンクールとかあって，上手にひけるかなと考えとる」と，「上手に」を繰り返しているところに，その思いの強さがうかがわれる。

ここで「コンクール」ということばから，筆者には不特定多数の人に聴かれる（見られる）こと，評価されること，そこで成功をおさめることの輝かしさ，コンクールでうまくいかなかったときの失望，コンクールの緊張や不安などが連想され，テスト状況において被検者が自分の心を査定されるという不安，あるいは人に評価されるということに対して抱いているのではないかと思われる，深い不安がうかがわれた。"コンクール"を持ち出すことで，人の評価の下で自分をよくみせること，が被検者の中では重要なのであると思われる。そしてコンクールについての不安は「ちょっと」と言っているが，「出やんとこうかなとか，出たくないなあとか，失敗したらどうしようか」と，全てネガティブと考えられる表現になっていることから，相当不安なのではないかと思われる。それを「ちょっと」と述べたのは，不安を抑える力があるとも考えられるし，他者によくない自分を見せることに抵抗があったのかもしれない。そして「出やんとこうか」というところに，問題回避的な在り方も推測される。

結末は「成功すると思う」と語っているが，成功に到るプロセスについては一切省略され，観念的なレベルにとどまっていることから，成功したいという思いの強さや，先に述べたような大きな不安を一気に解決に導きたいという思いなどがうかがわれる。しかし，そのプロセスはよくわからなくとも，最終的には成功すると一言語れるところに，大きな不安にあっても自分はやれるであろう，という自分に対する信頼を推測することも可能であろう。どのようにこのことばを被検者が語ったのかを知りたいところである。

まとめると，この被検者は自分の心に戸惑うような何かを抱えているように思われる。被検者は人にみられること，評価されることついて非常に不安で，人によくみられたいと願っていると推測される。そのためTATのテスト状況の中で，自分の心をのぞくこと，のぞかれることに大きな不安を抱えていると思われる。客観的な枠，あるいは他人による枠に拠るのはそのためかもしれない。しかし拠るところがあれば，そこに合わせて答えられる力はもっていると考えられる。評価されることへの不安の対処の仕方は，一気に解決を試みるというところがうかがわれたが，そこには，不安ながらもやっていける一面もあると思われた。

上記の分析・解釈には，分析枠であげられるような視点（例えば反応時間）や反応分類を参考にしたが，最も大切な糸口となったのは「上手にひけるかな」「不安」ということばがどういう意味なのかを考え，それがどのような流れで語られるか，についてである。筆者自身が評価される時などに覚える不安という，個人的なものも含まれてはいるであろうが，「不安」ということを身体全体で感じながら物語を読み進めていくとき，この語りにこめられていたと思われる，人に評価されることの不安，また評価されることに怯えねばならない"自分"が感じられることの不安といったものが，より生き生きと感じられた。感じ方は読み手によって様々であろうが，その一例としたい。

6. 終わりに

本稿ではTATが"テスト性・客観性"をもつにもかかわらず，標準化された分析・解釈法がなじまないとされるのは，TATが"テスト性・客観性"と相対立する"物語性・主観性"を有するからではないかと考え，それぞれの特徴と，よりTATらしさをもった"物語性・主観性"を生かす重要性を考えた。また"テスト性・客観性"と"物語性・主観性"は補い合うものでもあり，これら2つをつなぐ試みもしてみたが，不十分な点は多い。今後は"テスト性・客観性"については，例えば信頼性や妥当性についての研究，"物語性・主観性"については，例えば語りの質的側面を拾う研究，というように，両者についての研究をますます発展させ，両者をつないでいくことが課題であろう。

注

1）氏原は「被験者」と記述しているが，筆者はTATを検査であると考えるので，「被検者」と記述する。
2）厳密には，検査者と被検者とTATとの3者の関係性であると考えられる。

文献

安香宏（1997）：いくつかの基本概念　安香宏・藤田宗和（編著）TAT解釈の実際　新曜社　pp3-13

藤掛明（2003）：氏原氏－鈴木氏のTAT論争を読んで　臨床心理学，3（2），236-238
藤田宗和（2002）：情報分析枠による解釈　臨床心理学，2（5），650-655
井口敏之（2002）：TATの事例　臨床心理学，2（5），645-649
河合隼雄（1991）：心理療法序説　岩波書店
河合隼雄（2001）：事例研究の意義　臨床心理学，1（1），4-9
前川あさ美（1991）：心理臨床における測定　市川伸一（編著）心理測定法への招待　サイエンス社 pp268-302
森岡正芳（2004）：ナラティヴとは何か　北山修・黒木俊秀（編著）語り・物語・精神療法　日本評論社 pp147-160
Murray, H.A.et al.（1938）Explorations in Personality. Oxford. New York. 外林大作（訳）（1961）パーソナリティⅠ　誠信書房
中村雄二郎（1992）：臨床の知とは何か　岩波書店
鈴木睦夫（1991）：投影法（2）－TAT　三好暁光・氏原寛（編著）臨床心理学第2巻　アセスメント　創元社 pp 203-215
鈴木睦夫（1997）：TATの世界－物語分析の実際　誠信書房
鈴木睦夫（2002a）：TAT－絵解き試しの人間関係論　誠信書房
鈴木睦夫（2002b）：TATの基本　臨床心理学，2（4），547-554
鈴木睦夫（2002c）：まとめ－少しばかりのコメント　臨床心理学，2（4），669
鈴木睦夫（2003a）：氏原氏の疑義に答える　臨床心理学，3（1），73-78
鈴木睦夫（2003b）：氏原氏の「感想」についての感想　臨床心理学，3（2），375-378
豊田洋子（2002）：関係性と防衛を中心にしたAさんのブラインド・アナリシス　臨床心理学，2（5），656-661
坪内順子（1984）：TATアナリシス　垣内出版
氏原寛（2002）：TAT事例を読む　臨床心理学，2（5），662-668
氏原寛（2003a）：鈴木氏のコメントについての疑義　臨床心理学，3（1），72-73
氏原寛（2003b）：鈴木氏の「答え」についての感想　臨床心理学，3（2），233-236
海本理恵子（2004）：TAT再考　京都大学大学院教育学研究科紀要，50，386-397
山愛美（2003）：言葉の深みへ－心理臨床の言葉についての一考察　誠信書房
山本和郎（1992）：TATかかわり分析－ゆたかな人間理解の方法　東京大学出版会

（心理臨床学講座　博士後期課程3回生）

（受稿2005年9月9日、改稿2005年11月28日、受理2005年12月8日）

Analysis and Interpretation of TAT

FUJIMOTO Makiko

The Thematic Apperception Test (TAT) is a psychological test whereby a subject is asked to tell a story on cards. No standard methods are available to analyze and interpret the test results. To standardize such methods would not be proper because the subject has to connect a series of ideas into a logical sequence. Understanding the psychology of the subject is important so as to analyze and interpret the results of the TAT. The senses behind the story must be understood to appreciate the sequence of ideas. For the analysis and interpretation of the results to be objective and understandable, it is necessary to describe the processes of the analysis and interpretation as accurately as possible.